

TSUKI YAMA ZAWA - SITE

月山沢遺跡



1980

山形県教育委員会

つき やま ざわ

月山沢遺跡

発掘調査報告書

昭和55年 3月

序

本報告書は、昭和47年度に実施計画が策定され、国営直轄事業として総合多目的ダムの工事が進められております。月山沢遺跡は、寒河江ダム建設の工事に伴い、事前に充分な協議を重ねて昭和54年度に山形県教育委員会が主体となり、西川町教育委員会の協力を得て実施した、月山沢遺跡の発掘調査記録であります。

西川町には、寒河江川の上流域を中心に先史時代の遺跡が数多く発見されており、本遺跡もその一つであります。調査により、旧石器・縄文時代早期の多くの石器と土器が出土し、自然の営力も切り開く、力強い人々の生活の跡が明らかになりました。調査の成果が、埋蔵文化財に対する理解と、今後の研究の一助となれば幸いです。

最後に、調査に参加された各位はもとより、多大な御協力と御指導を賜った建設省東北地方建設局寒河江ダム工事事務所と西川町教育委員会の方々に対し、深甚の謝意を表します。

昭和55年3月

山形県教育委員会

教育長 吉村敏夫

目 次

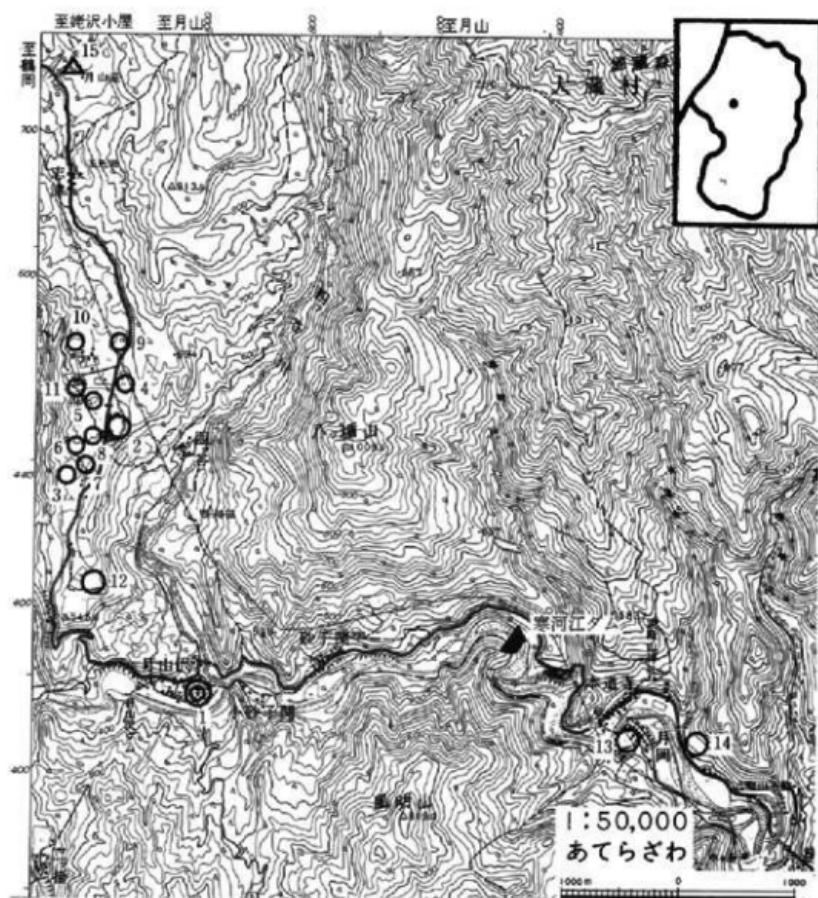
例 言

I 遺跡の立地と環境		1 本報告書は寒河江ダム建設関連事業に係る発掘調査報告書である。調査は山形県教育委員会が主体となり、昭和54年8月20日から9月1日（延13日間）まで実施された。
1 遺跡の立地 1	
2 周辺の遺跡 1	
II 調査の経緯		2 調査に亘っては、西川町教育委員会並びに建設省東北地方建設局寒河江ダム工事事務所などの関係機関の協力を得て行なわれ、ここに記して感謝を申し上げる。
1 調査に至る経過 2	
2 調査の経過 3	
III 調査の概要		
1 調査の方法 5	3 調査体制は下記の通りである。
2 層序 6	調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団
3 遺物の分布 6	担当者 佐々木洋治（係長）
IV 出土遺物		佐藤正俊（主任）・大類誠（山形県教育庁文化課）
1 縄文時代の遺物 10	
2 先土器時代の遺物 12	
V まとめ 16	
（参考文献）		

挿図・図版目次

第1図 遺跡位置・分布図	
第2図 出土器拓影図 4
第3図 遺跡地形図 4
第4図 グリッド配置図・層序図 5
第5図 遺物分布図 8
第6図 出土石器実測図(1) 11
第7図 出土石器実測図(2) 13
第8図 出土石器実測図(3) 15
付表 石器計測一覧表 17
図版1 遺跡遠景　調査区完掘状況	
図版2 出土石器（尖頭器）表・裏	
図版3 出土石器（削・搔器他）表・裏	

- 補助員 根本忠一（明治大学2年）
 福島日出海（立正大学2年）
 事務局 事務局長・山田信一（山形県教育庁文化課課長）事務局長補佐・荻野和夫（同課長補佐）事務局員・設楽周一郎（同課主事）
- 4 挿図縮尺は、すべて $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{3}$ を原則としそれぞれにスケールを示した。
- 5 本報告書は、佐藤正俊・大類誠が中心に執筆し、佐藤義信が補佐した。本書の編集は、名和達朗が担当し、全体については佐々木洋治が統括した。



第1図 遺跡位置・分布図

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1、月山沢遺跡（先土器～縄文早期） | 9、弓張平日遺跡（先土器時代） |
| 2、弓張平B遺跡（　　） | 10、弓張平I遺跡（縄文時代） |
| 3、弓張平A遺跡（　　） | 11、弓張平J遺跡（　　） |
| 4、弓張平C遺跡（先土器時代） | 12、弓張平K遺跡（先土器～縄文） |
| 5、弓張平D遺跡（先土器～縄文） | 13、月岡遺跡（縄文晩期） |
| 6、弓張平E遺跡（　　） | 14、清水小屋遺跡（先土器・縄文後期） |
| 7、弓張平F遺跡（　　） | 15、黒鱗石露頭地点 |
| 8、弓張平G遺跡（　　） | |

I 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

月山沢遺跡は、西村山郡西川町大字月山沢東地内に所在し、月山山系の一つ姥ヶ岳(標高1600m)の南麓に細長くのびる台地状の丘陵の南端部に位置し、この地域一帯は400m前後の標高を計る。南側から東側にかけては寒河江川の大きく蛇行する部分によって限られている。基底は、姥ヶ岳の火山から流出した熔岩や泥流などで、その台地上の上位には寒河江川によって開析された段丘堆植物の疊層や砂層をはさんでいる。

本遺跡は、熔岩や火山碎屑物を基底とする開析台地にあり、微高地の台地がほぼ南北に舌状に張り出し、標高369mから375mを計る。全体の地形は、西側寄りから東端部にかけては旧西川町立月山沢小・中学校建設の際に大半が破壊を受けているため不明確である。今回の調査区域は、北西側地区のやや緩傾斜地となっている墓地・荒地(旧畠地)の箇所である。かつて、旧月山沢小・中学校グランドや中央南側部と東端部において、尖頭器や石刃・剣片・碎片などが採集されている。(第2図)

2 周辺の遺跡

この周辺地域の遺跡は、朝日山系北東斜から北流する根子川、月山南麓から南流する大越川が月山沢付近にて合流し、最上川の支流のひとつである寒河江川となり東方に流れ出しており、それぞれの流域の段丘上に立地している。この上流域には、根子・松の木平・お仲間林・月岡・清水小屋遺跡などを始め、姥ヶ岳の南麓にのびる台地上の丘陵地帯には弓張平遺跡群A~K遺跡の11ヶ所など先土器時代から縄文時代後・晩期までの遺跡が点在している。(第1図)

寒河江川流域においては、縄文時代中期の遺跡が最も多点在し、次いで上流域には先土器時代の遺物を出土する遺跡があり、根子・お仲間林遺跡ではナフ形石器・尖頭器・彫刻刀・搔器・石刃が発見されており、松の木平遺跡では尖頭器・彫刻刀・搔器などが採集されている。とくに、昭和52年から54年まで第5次調査に亘って行なわれた(註1)弓張平B遺跡では、尖頭器とナイフ形石器群が層序的上下関係をもって出土し、その石器群の平面的位置関係も明らかとなった。縄文時代の古い段階は、弓張平B遺跡で草創期と考えられる円形搔器・搔器・削器・石鍬なども出土し、弓張平A遺跡では田戸下層式併行の住居跡・土塙・炉穴などが検出されている(註2)。本遺跡の東方下流約8kmには縄文時代晚期大洞A式期の住居跡や土塙なども検出されている。(註3)。このように近年寒河江川流域における発掘調査の事例も増え、考古学的な研究・解明の気運が高められている。

II 調査の経緯

1 調査に至る経過

西川町には数多くの遺跡があり、「山形県遺跡地図」(昭和53年3月・山形県教育委員会編)によれば、43ヶ所の遺跡が明記されており、寒河江川の上流域を一帯とするこの地域には16ヶ所ほどの遺跡が先土器時代から繩文時代後・晚期にかけて、時代的には比較的古い遺跡が群在・点在して、確認されている。

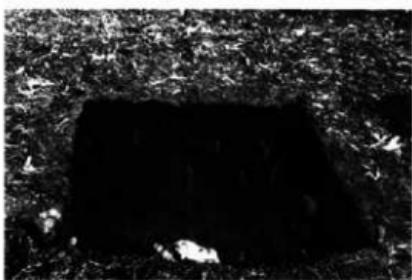
月山沢遺跡は、昭和初期に月山沢小学校造成の際に石片などが発見され、戦後町立月山沢小・中学校の造成がくり返され、尖頭器などが採集された。昭和35年の「山形遺跡地名表」にも登録され、地元の研究者や学生なども尖頭器・彫刻刀・搔器などを多數採集している。

この地域にも、昭和44年に国の新全国総合計画の発表と同時に、「奥羽山系レクリエーション都市—弓張平公園—」整備計画や東北横断自動車道仙台～酒田線の計画とあいまって、国直轄事業による総合多目的ダム—寒河江ダム—の計画が打出された。

昭和52年には、ダム建設も具体化されたため、県教育委員会は開発に先立ち埋蔵文化財保護の立場で開発側と調整するため、東北地方建設局寒河江ダム工事事務所と事前に協議を行ない、昭和53年10月に分布・試掘調査を実施し遺跡の概要を策定した。協議の結果、昭和54年8月に記録保存としての緊急発掘調査を実施したものである。



遺跡位置



30-36G全鏡



土器セクション



尖頭器出土状態

2 調査の経過

今回の緊急発掘調査は、遺跡の東半分が旧月山沢小・中学校建設の際に大半が削平され、遺跡としての原型をとどめていないために西北側の墓地付近を中心に調査を行なう。墓地内に基点を設定し、東西をX軸・南北をY軸のグリッドを決める。調査の期間は、昭和55年8月20日より、9月1日までの延13日間を要し、調査の経過は次の通りである。

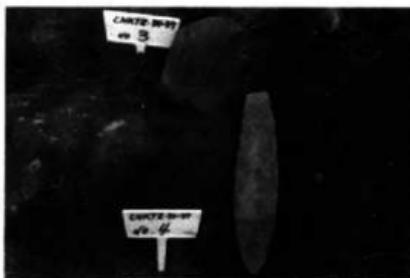
8月20日(月) 山形より器材を運搬し、台地上の状況を把握するために、表面採集などを実施し、調査区の選定を行なう。その結果、遺存状態の良いと思われる墓地・荒地周辺に決め、草刈作業より開始する。

8月21日(火) 昨日に引き続き、草刈作業を実施する。午後から強雨にみまわれ、作業を中止する。

8月22日(水) 残った部分の草刈作業を行ない、午前中で終了する。午後からグリッド設定を行ない、地形にあわせ墓地南辺の東限より西へ3mの地点を基準とし、30-30グリッド抗とする。これを基点にし東西南北に基本軸を設定する。

8月23日(木) $2 \times 2\text{ m}$ グリッドを一單位に、30-35・37、31-34・36、32-30・37、34-35の各グリッドを調査する。各グリッドの第Ⅰ層下部から剝片・碎片類が出土しはじめる。

8月24日(金) 昨日のグリッドを引き継ぎ調査し、新たに31-38、33-36・38、34-37、35-36グリッドを調査する。31-38



尖頭器・石核出土状態



猿器出土状態



円形猿器出土状態



土器片出土状態

グリッド第I層下部より、田戸下層式併行の土器が1片出す。

8月25日(土) 新たに35-44, 37-37-40, 38-43, 40-37・39, 42-37・41各グリッドを調査する。33-38グリッドから円形搔器が出土する。

8月26日(日) 雨天のため調査を中止し、室内で遺物の洗浄・実測を行なう。

8月27日(月) 32-40, 33-39, 34-41, 41-44の各グリッドを加え、32-30~33グリッド内の東側に南北のセクションベルトを設定する。遺物出土状態の写真撮影を始める。尖頭器・石核が出土する。

8月28日(火) 各グリッドの調査を継続させ、30-34-37グリッドを西側に拡張する。尖頭器・搔器等が出土する。

8月29日(水) 各グリッドの精査作業・遺物の写真撮影、土層断面の測図を行ない、遺物の記録を始める。石鎌が出土する。

8月30日(木) 29-34・35, 30-35・37, 32・33-39グリッドなど完掘する。遺物の記録を継続し、土層断面の写真撮影及び測図作業を行なう。完掘の済んだグリッドから清掃を開始する。30-35・37グリッドから尖頭器が1点づつ出土する。

8月31日(金) 現場における遺物の記録、写真撮影、測図作業は本日をもって終了する。器材の確認・清掃・梱包を行ない終了する。

9月1日(土) 調査区の清掃を行ない、本日をもって、最終的に本遺跡の発掘調査を終了する。

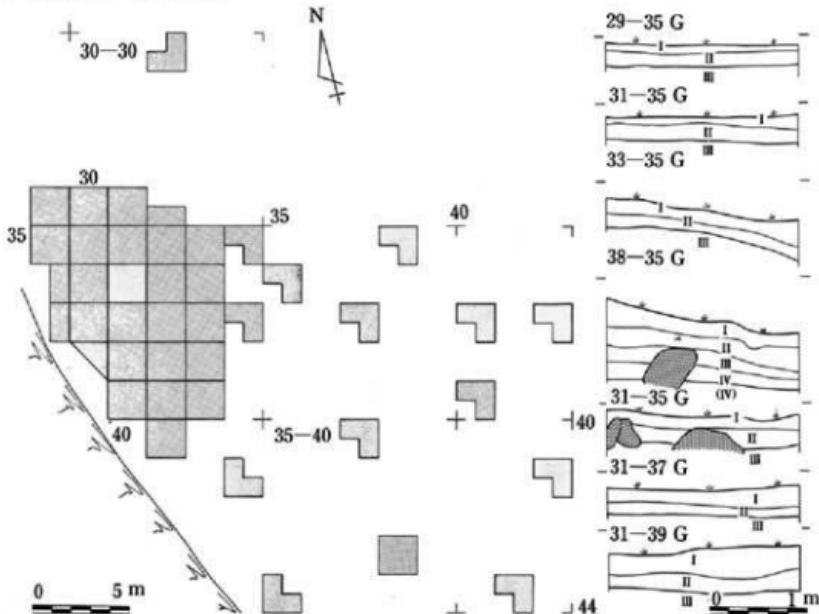


III 調査の概要

1 調査の方法

本遺跡の緊急発掘調査は、さる昭和53年10月に全域にわたって分布・試掘調査を実施した。その結果、遺跡の東半分は学校建設時に大半が削平され、グランドに剝片・碎片などが散布する程度で、遺物包含層も確認されなかった。また、北西部についても北側の地区では、墓地造成の際に大部分が破壊され、遺物が若干表抜される程度であった。今回の調査は、分布・試掘調査の結果に基づき、墓地南側周辺部を中心に旧畠地の地区を発掘調査したものである。

調査の方法は、墓地内にグリッド基準点を設け、地形を考慮したうえで東西方向をX軸・南北方向をY軸とし、Y軸方向N-10°20'-Eを計るように設定し、グリッド名称はX・Y軸とも数字番号とした。グリッド法は 2×2 mを一単位として、さらに一単位を1mに四区画した小単位を設け、 2×2 mの単位内をL字状に区画し、遺物が集中する調査区をL字状から 2×2 mの一単位とし順次拡張する方法をとり、調査区の遺物分布状況を主体に追究することとした。



第4図 グリッド配置図・層序図

2 層序

遺跡は丘陵上に位置し、全体的に東南方向に緩やかに傾斜している。発掘調査区域は、墓地や畠地に利用されていたこともあって、擾乱が著しく進んでいる。遺跡の基本的な層序は4層に分けられる。(第4図)

- | | |
|-------------|--|
| 第I層(黒色土) | 表土で耕作や削平の影響をうけ、厚さがまちまちである。厚さ8~30cm。 |
| 第II層(暗黄褐色土) | 色調は茶褐色に近く、やや粘性があり微砂質である。火山噴出物の風化した小礫(3~5cm)を含む。全体的に繰りが弱くやわらかい。厚さ10~30cm。 |
| 第III層(黄褐色土) | 火山噴出物の風化礫中位いのもの(5~10cm)を多量に含み、粘性があり、若干のバミスを含む。第II層に比べて繰りが強い。 |
| 第IV層(黄褐色土) | 火山噴出物の風化礫で大形のもの(10cm以上)を含み、巨礫の底面となっている。繰りも強く堅い。 |

各層は東南方向の傾斜に沿って、漸次厚く堆積しており、遺物の多くは、第I層下部から第II層上部に包含されている。第III・IV層中には認められないようである。

3 遺物の分布

台地上において遺物が発見される地区は、東南側の旧月山沢小・中学校の校地、及び北西側の墓地や、南側の旧畠地であるが、過去にこれらの場所から、尖頭器・石刀・搔器・彫刻刀を始め、剝片・碎片・石核等の先土器時代の遺物が採集されている。現在、荒地(旧畠地で精査区)を除いて、遺跡の破壊は進んでいる。このような事から、台地上にも幾つかの、遺物の出土する地点があったと想われる。このことを考慮して、今回調査した区域の遺物の分布について記述してゆく。

第4図は、第I層下部から第II層上部、及び第II層中より出土した遺物の平面分布図である。縄文時代の遺物と、先土器時代の遺物とを合わせて図化している。遺物の総点数は約330点である。遺物間の相対的なレベルは大差がないようである。

発掘調査が進むにつれて、遺物の出土とともに、大小様々な礫があらわれて、第I層下部では目立ちもしなかったが、第II層以下の層から著しく目立つようになる。巨礫になると、地表面の所々に頭をのぞかせており、2×2mグリッド内に納まるものさえある。石質はほとんどが同質で、安山岩である。風化が著しく脆くなっている。このような礫の分布をみると、無秩序であり、配石などの遺構とは考えられず、自然的營力の結果として捉

える方が妥当であろう（図版1の下段参照）。

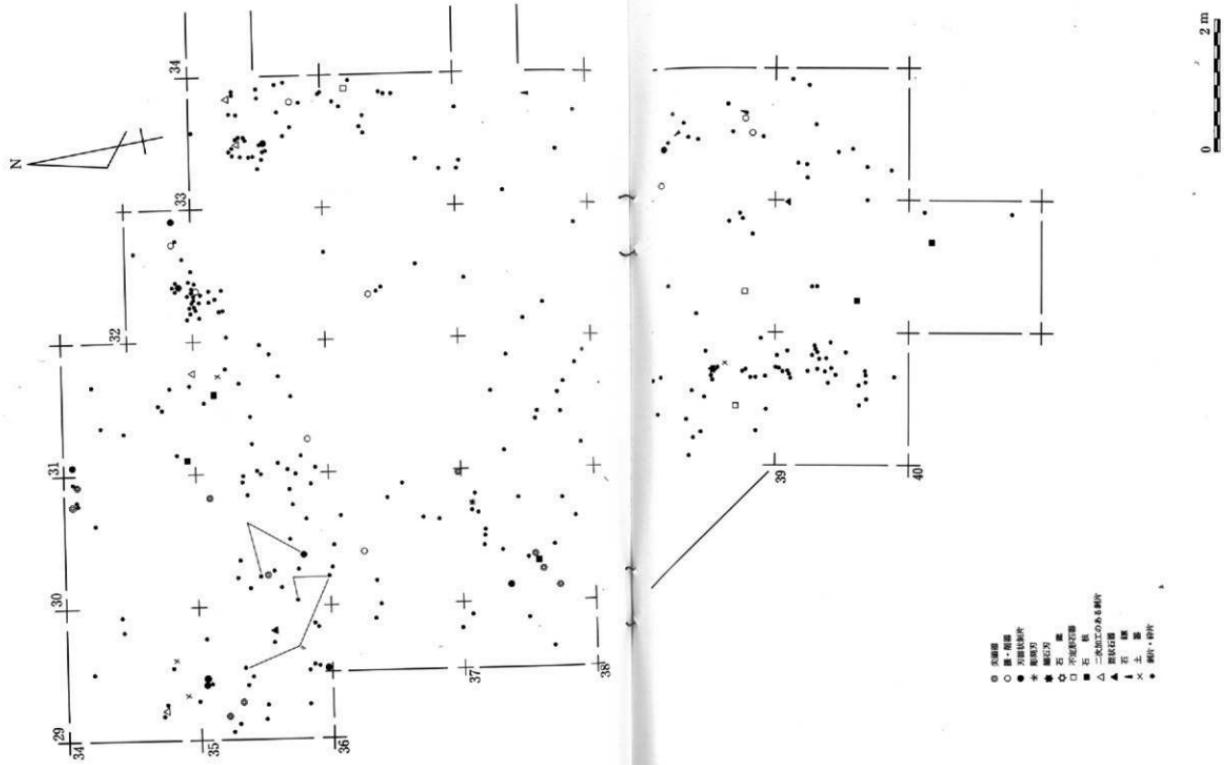
次に遺物の分布についてみてみよう。縄文時代の遺物や、先土器時代の遺物の分布は、それぞれある種の傾向がみられるようである。大まかに言って、精査区の南東側に縄文時代の遺物がまとまり、西側に先土器時代の遺物がまとまりをもっている。

縄文時代の遺物分布を具体的にみていくと、石錐が33-37グリッド(1点)、33-38グリッド(2点)、内に出土し円形搔器も33-38グリッドと石錐に近接して発見されている。範状石器は2点出土しているが、1点は割と石錐等に近接するが、もう1点は、先土器時代の遺物のまとまりの中にみいだされる。土器片は5片発見され、うち3片は29-34グリッド内で、31-35・38グリッド内から、それぞれ1点ずつ発見されている。土器片は疎らにみられるにすぎない。

先土器時代の遺物分布は、尖頭器が29-35グリッド(2点)、30-34グリッド(2点)30-35グリッド(3点)、30-37グリッド(3点)から、それぞれ発見され、これは精査区の北西側にあたる。同様な分布傾向は、彫刻刀・刃器状剝片・搔器にも認められる。現段階で北西側のまとまりの中で、2個体分の剝片類接合資料が得られており、この資料をもとにして、同一個体と考えられる資料の分布を追っていくと、3片接合の資料を中心にして、約3~4m範囲内の広がりをもつようである。

以上、主に土器や石器(tool)を中心にみてきたが、これらの他に、剝片・碎片・石核類にも注目に土器みるならば、31-38・39グリッドを中心にして剝片が多く、中には細石刃と考えられる資料もみられる。32-34・35グリッドや、33-35グリッドにも、剝片・碎片の集中がある。33-35グリッドからは、削片(スパール)が発見される。全体的に見れば、ばらつきが目立つ。石核にしてもばらつきがあり、石器や剝片・碎片等との関連性などが、今後の課題となるであろう。

更に、これらの遺物の分布とともに、先にも述べた礫の在り方をも加味して考えてみると、礫と特に有機的な関係はみいだせない。31-36グリッド内には巨石が存在するために分布図では空白になっているが、このような巨石は方々にみられる。元来、遺跡が形成される以前から存在しており、この中で巨礫による生活の営みに多少影響があったとしても、小さな礫はある程度埋没していたと考えられ、これと言った関連性はなかったと考えられる。また、遺物の分布は、精査区範囲内だけに認められるものではなく、北側では、墓地区域のほぼ全体に、南側では、ある程度台地の縁辺に沿って広がり、いくつかの地点分布があったものと思われる。



第5図 遺物分布図

IV 出土遺物

月山沢遺跡の出土遺物は、整理箱にして約3箱分で、遺物総数は約330点である。それは先土器時代のものと縄文時代のものとに二分できる。主体は、先土器時代の遺物である。縄文時代の遺物から略述してゆく。

1 縄文時代の遺物

(1) 土器片 (第5図1~4)

全部で5片出土し、うち4片の拓影を図示する。いずれも小破片で摩滅が著しい。1は31-38グリッド第1層下部出土の口縁部破片である。色調は外側が黒色で、内面が黄褐色を呈する。器壁の厚さは7mmである。器形は口縁がかるく外反する尖底深鉢形になると考えられる。胎土に大粒の砂を多く含むが焼成は良好である。文様はやや斜行する太目の沈線が横位に巡ると考えられる。2~4は29-35グリッド出土で、3は第1層中より、2・4は第II層上部より発見される。2と3は胴部破片と考えられ、色調は黄褐色を呈する。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良くない。表面は両方とも荒れており、擦痕のようなもの認められるがはっきりしない。厚さは約7mmである。4は29-34グリッド第II層出土である。口縁部に近い部位と考えられる。色調は茶褐色を呈する。胎土は割合緻密で堅い。

文様は瓜形文が認められ、横位に巡ると考えられる。その下位には、斜めに交わる格子目状の沈線が施されている。厚さは約6mmである。他に31-35グリッド第II層からも、小破片が出土している。色調は茶褐色を呈し、胎土は緻密な方である。厚さは約6mmである。外面に文様は認められない。

(2) 石器

調査で得られた石器(tool)は、石鎚3点、笠状石器2点、円形搔器1点、石錐1点などである。石質はすべて頁岩を使用している。

石鎚 (第6図1~3)

すべて無茎の石鎚で、完形のもの1点、先端及び脚の一部を失うもの1点、先端部を失うもの1点である。それぞれ形態が異なる。基部がほぼ直線的になり、脚部が不明瞭で、形が将棋の駒に似るもの(1)、脚部と身が明瞭であり、えぐりの浅いもの(2)、両側縁が割合に開き、えぐりの深いもの(3)がある。石鎚の素材は縦長剥片を利用したものと考えられ、先端部方向に打瘤をもつ例がある(1)。

石錐 (同4)

横長の剥片を使用し、錐部は打瘤を打撃して作出されている。背面を加工した後に、主要剥離面を加工している。錐部の断面は三角形を呈する。

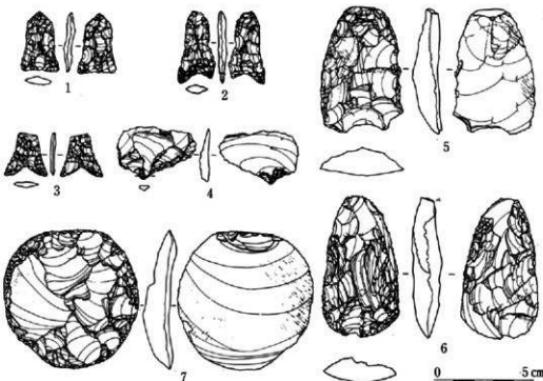
笠状石器 (同5・6)

縦長の部厚い剥片を使用し、横断面がカマボコ状を呈するもの(5)、横長剥片を使用し横断面が凸レンズ状を呈する例の2者がみられる(6)。前者は、打面、打瘤をそのまま残して、背面側だけに加工を施しており、両側縁は丁寧な調整剥離が認められる。刃部は先端に認められ、両側縁を調整した後に作出されている。本例の刃部は破損している。後者は、主要剥離面の打痕、及びその周辺を加工し、背面側は階段状剥離で側縁が調整され、その後に、押圧剥離によって刃部を作出している。主要剥離面の刃部には光沢があり、使用際にできたと考えられる擦痕がみられる。

円形搔器 (同7)

縦と横の長さが同じくらいの剥片を使用し、主要剥離面側の打瘤を除去した後に、背面側のほぼ全周に押圧剥離を施している。

以上が縄文時代の遺物である。剥片・碎片・石核等も縄文時代のものがあったと考えられるが、ここでは割愛した。



第6図 出土土器実測図(1)

2 先土器時代の遺物

月山沢遺跡の主体となる遺物は、石器のみである。その内容は、尖頭器10点、彫刻刀1点、搔・削器9点、細石刃1点をはじめ、削片(スポール)1点、刃器状削片10点、石核、剥片、碎片が得られた。石材は頁岩がほとんどで、わずかに黒耀石が含まれる。

尖頭器 (第7図8~17)

有舌尖頭器、、木葉形尖頭器に大別できる。石材はすべて頁岩を使用している。

有舌尖頭器(第7図16~17)舌状の突出部を有するものを一括する。身部から先端部を失うもの(16)、先端部を失うもの(17)と2点出土している。いずれも大形のものである。16は舌部が逆三角形で、舌部側縁がふくらみをもっている。直脊部を観察したかぎりでは、大方A面の両側縁は先頭部から舌部にかけて、B面は逆に舌部から尖頭部にかけて、調整がみられる。(註4) 17は現存長17.5cm、最大幅5.2cmと大形である。縦長の削片を使用したものと考えられる。舌部側縁は内弯気味に調整され、舌部先端は鋭く入念な加工がみられる。身部はふくらみをもちながら尖頭部へ向う。両側縁のギザギザは目立たない。

木葉形尖頭器 (同8~15)

有舌尖頭器以外のものを、木葉形尖頭器として一括する。当遺跡の尖頭器の中では最も多く出土している。これらは2分類して説明する。

a類(8・9) 柳葉形尖頭器に近似した形態をもつもので、全体に入念な押圧剥離が施され、基部は丸みをもち、尖頭部は鋭く調整がされている。原創的に、両面とも基部から尖頭部方向に調整剥離がみられ、最大幅は身部中央より下部にある。両側縁のギザギザは目立たない。

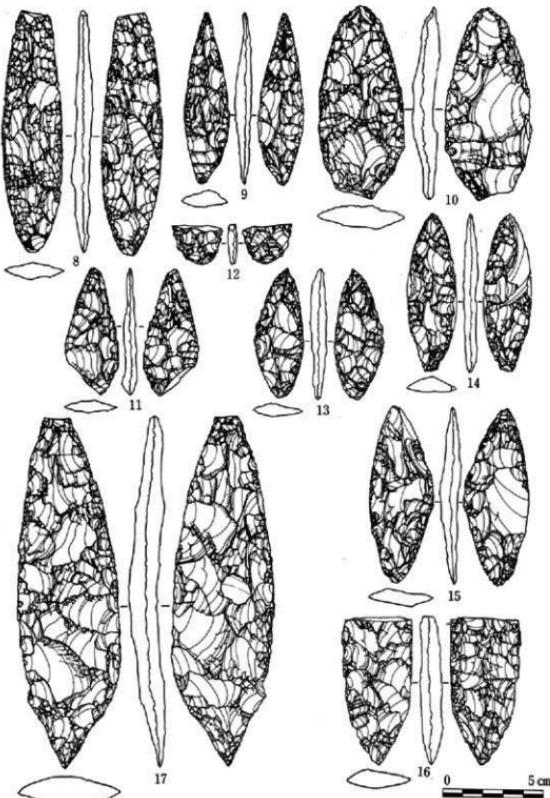
b類(10~15) 基部に丸みをもち、尖頭部に鋭さはなくやや丸みをおびる。全体的に幅広である。最大幅は基部と身部の接点にもつものが多い。14・15のように縦長削片を使用して、背面や主要剥離面、いわば素材の面を大きく残しているのが観察できる。10は、幅広の木葉形尖頭器であるが、最初B面を加工した後にA面の加工がみられる。両側縁の調整は16の有舌尖頭器と同じである。

撓 器 (第8図19・20・21)

すべて頁岩を使用しており、刃器状削片を素材に先端に刃部を作出している。19は、両側縁の一部にきめのこまかい加工がみられ、左端につくりだしがあり、撓錐器の可能性もある。22は削器と兼用している。

削 器 (18・21)

刃器状削片を使用し両側縁に主要剥離側からの加工がみられる。石材は頁岩を使用している。小さな黒耀石の原石を加工したものと考えられ、図の上と下に外表がみられる。刃



第7図 出土石器実測図(2)

部は粗い加工で両側縁にみられる。黒耀石は良質のもので、気泡はみられない。

彫刻刀形石器 (22)

1点のみ確認している。綫長剣片を折り、小さな打面を作出し彫状剥離を行なっている。石材は頁岩を使用している。

細石刃 (23)

31-38グリッドから、碎片類とともに1点出土している。先端部を失い二次加工はみられない。或いは、石器製作の際にできた、はねものとしての可能性もあるが、打面調査がみられることから、一応細石刃(註5)として扱った。石質は頁岩を使用している。

削片 (24)

33-35グリッドから出土したもので、後つき削片と考えられる。1点確認している。石質は頁岩を使用しているが、23の細石刃とは別個体である。

二次加工のある剝片 (26)

刃器状剝片の先端近くに、細かい剥離が施されている。当遺跡において、割合大きい剝片に付いた範囲に剥離が施されている。

石核 (27)

硬質頁岩製の残核である。刃器を剥ぎ取った石核と考えられるが、現在のところこの石核と同一個体の刃器は未発見である。両極に打面をもっている。一方の打面から刃器を剥取った後、半転させ下の打面を使用し、最初に剥ぎ取った面の反対の面に加壓し、刃器を剥ぎとっている。この種の石核は1点だけ出土している。

(註1) a「弓張平遺跡」第1・2次調査報告書 山形県教育委員会 1978

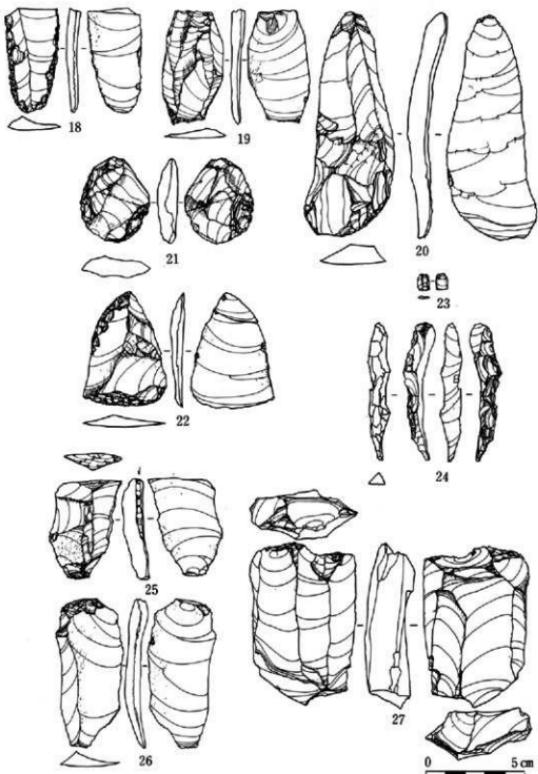
b「弓張平遺跡発掘調査説明資料」 山形県教育委員会 1979

(註2) 「山形県西村山郡西川町弓張平A遺跡」発掘調査説明資料 西川町教育委員会 1979

(註3) 「的場遺跡」 山形県教育委員会 1977

(註4) 石器実測図、圓化したうちの左側を反りにA面とし、右側の面をB面とした。これは飽くまで便宜的な呼称である。

(註5) (註1) aの中、寒河江流域(西川町)の石器時代遺跡どうりの中で、月山沢遺跡出土の遺物が紹介されており、細石刃核と思われるものが出土しているという。



第8回 出土土器実測図(3)

V まとめ

前章までに述べたことを要約して、まとめとする。

1、月山沢遺跡は先土器時代と縄文時代に分けられ、主体は先土器時代である。遺構は確認されなかった。

2、先土器時代の遺物は、尖頭器(有舌尖頭器・木葉形尖頭器)をはじめ、搔器・削器・彫刻刀・石錐等が、精査区北西部側にある程度のまとまりをもって出土した。月山沢遺跡の遺物の内容からして、中林・弓張平B遺跡に併行乃至、中林・弓張平B遺跡より古い段階に、編年の位置があたえられると思われる。

尚、細石刃や接合削片なども発見されたが、尖頭器等の石器との関係は不明瞭であり、今後の課題の一つであろう。

3、出土した石器の中で、最も特徴的にみられた尖頭器は、製作工程においてある程度の規則性をもって製作され、素材の吟味も行なわれたと思われる。

4、縄文時代の遺物は、石鎚・鉋状石器・円形搔器が南東部側にまとまりをみせる。土器は疎らに分布する。1は田戸下層式併行期に、4は三戸式併行期に、それぞれ編年の位置があたえられ、2・3は、1や4に併存するか、乃至はもっと古い時期に位置があたえられるかもしれない。

本報告書作成にあたって、福田孝司・森島 稔・森山公一・諸氏より、貴重な御指導・助言を賜わった。末尾ながら、ここに記して深く感謝いたします。

参考文献

飼持みどり「角二山櫛石刃の構造」「山形考古」第3巻・第2号 1979

井沢長介「新潟県中林遺跡における有舌尖頭の研究」「(東北大)日本文化研究報告」1966

中村孝三郎「越後の石器」学生社 1978

橋本 正「富山県大沢野町直坂II遺跡発掘調査概要」富山県教育委員会 1976

橋本 正「直坂II遺跡第5・6ニットから」季刊「どるめん」15 T I C C 出版局 1977

山下昌雄「岩井堂洞窟」第一回洞窟第8次発掘調査報告 ニュー・サイエンス社 1979

石器計測一覧表

No.	器種	地区名	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	石 鏈	33-38	完形	I層下部	頁岩	3.0	1.9	0.4	2.1	
2	石 鏈	33-37	一部欠損	II層	頁岩	3.6	1.9	0.5	2.5	
3	石 鏈	33-38	先端部欠損	I層下部	頁岩	2.1	2.1	0.4	0.8	
4	石 鏈	32-38	完形	I層下部	頁岩	2.6	4.0	0.5	2.3	
5	真状石器	32-39	完形	II層	頁岩	6.5	4.2	1.4	33.0	
6	真状石器	29-35	完形	I層下部	頁岩	7.0	3.6	1.3	40.4	
7	円形搔器	33-38	完形	II層	頁岩	7.0	6.8	1.2	60.6	
8	尖頭器	30-37	先端部欠損	II層	頁岩	12.2	3.0	0.9	32.2	
9	尖頭器	30-37	完形	II層	頁岩	8.6	2.3	0.9	12.0	
10	尖頭器	30-35	基部欠損	II層	頁岩	9.7	4.35	1.2	48.6	
11	尖頭器	29-35	基部欠損	I層下部	頁岩	7.4	2.3	0.7	10.1	
12	尖頭器	29-35	基部遺存	II層	頁岩	2.0	2.5	0.5	2.2	
13	尖頭器	30-35	完形	II層	頁岩	6.5	2.5	0.8	10.9	
14	尖頭器	30-34	完形	II層	頁岩	7.9	2.5	0.8	12.9	
15	尖頭器	30-35	完形	II層	頁岩	8.9	3.3	1.0	20.5	
16	尖頭器	30-34	尖頭部欠損	II層	頁岩	7.4	3.5	1.0	27.7	
17	尖頭器	30-37	先端部欠損	II層	頁岩	17.5	5.2	1.4	120.4	
18	削器	33-38	欠損	II層	頁岩	5.2	2.8	0.6	8.7	
19	撓器	30-36	完形	II層	頁岩	5.7	3.1	0.5	10.5	
20	撓器	31-35	完形	II層	頁岩	11.3	4.6	1.0	48.0	
21	撓器	32-36	完形	I層下部	黑曜石	4.3	3.5	1.1	13.4	
22	撓器	30-36	完形	I層下部	頁岩	5.8	4.2	0.6	33.5	
23	櫛石刀	31-38	先端部欠損	II層	頁岩	0.8	0.6	0.1	0.04	
24	削器	33-35	完形	II層	頁岩	6.9	0.8	0.6	4.9	
25	彫刻刀形石器	30-37	完形	I層下部	頁岩	5.0	3.7	0.8	14.2	
26	刃状削器片	29-35	完形	II層	頁岩	7.5	3.4	0.8	15.1	二次加工有り
27	石核	30-37		II層	頁岩	8.1	4.8	2.4	104.4	

(註1) 遺物番号は挿図中の石器番号と一致する。

図版 1



遺跡遺索(南側から望む)



遺物出土状況

図版 2



出土石器(尖頭器) 表



出土石器(尖頭器) 裏



出土石器(猿・削器他) 斧



出土石器(猿・削器他) 斧

山形県埋蔵文化財調査報告書第29集

月山沢遺跡

発掘調査報告書

昭和55年3月31日 印刷

昭和55年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 横大風印刷